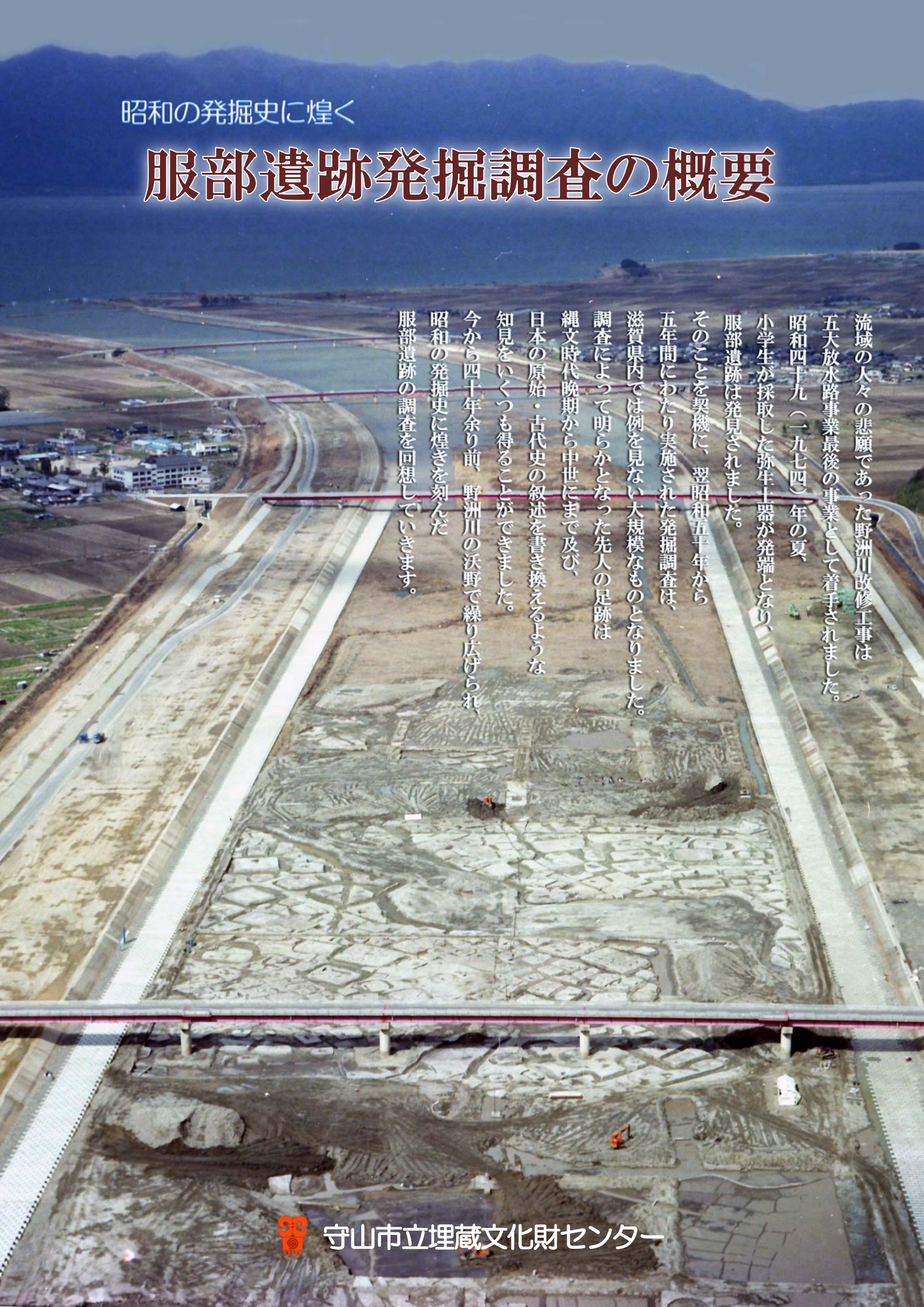




昭和の発掘史に煌く

服部遺跡発掘調査の概要

流域の人々の悲願であった野洲川改修工事は

五大放水路事業最後の事業として着手されました。

昭和四十九（一九七四）年の夏、

小学生が採取した弥生土器が発端となり、

服部遺跡は発見されました。

そのことを契機に、翌昭和五十年から

五年間にわたり実施された発掘調査は、

滋賀県内では例を見ない大規模なものとなりました。

調査によって明らかとなった先人の足跡は

縄文時代晚期から中世にまで及び、

日本の原始・古代史の叙述を書き換えるような

知見をいくつも得ることができました。

今から四十年余り前、野洲川の沃野で繰り広げられ

昭和の発掘史に煌きを刻んだ

服部遺跡の調査を回想していきます。



守山市立埋蔵文化財センター

I 野洲川改修工事

野洲川は鈴鹿山系を源とし、標高差千百m余りを約65kmの距離で琵琶湖に注ぎ込む県下最長の河川です。

流域に肥沃な土壌と豊富な水をもたらし、農耕を育んだ反面、その急峻な流れと中世以降の不断の築堤の結果、著しい天井川と化した野洲川は、水害をもたらす暴れ川として、「近江太郎」の異名をもつようになります。明治以降、凄惨を極めた大洪水だけでも12回を数え、多くの人命や家財が失われました。

昭和28（1953）年の台風13号による洪水では、堤防3ヶ所が決壊し、3名の犠牲者が出ました。このことがきっかけとなり、水害のない川の実現を目指す機運は一層高まり、ついに、昭和46（1971）年、戦後五大放水路事業最後の事業として野洲川改修工事が着手されました。

II 服部遺跡の発見と調査

服部遺跡は、野洲川改修工事の最中に発見されました。昭和49（1974）年夏、地元・中洲小学校の児童が服部大橋の橋脚工事現場で多量の弥生土器を見つけました。このことが遺跡発見のきっかけになりました。

遺跡確認調査の結果、遺跡の広がり、野洲川工事箇



▲現在の野洲川



▲予備調査実施風景（昭和49年度）

所だけでも、幅200m、全長600m以上、面積にして12万㎡にも及ぶことが明らかになりました。

今から40年以上も前の昭和50（1975）年から54年の5年間にわたり、滋賀県内では前例のない大規模な発掘調査が繰り広げられたのです。

III 調査の経緯

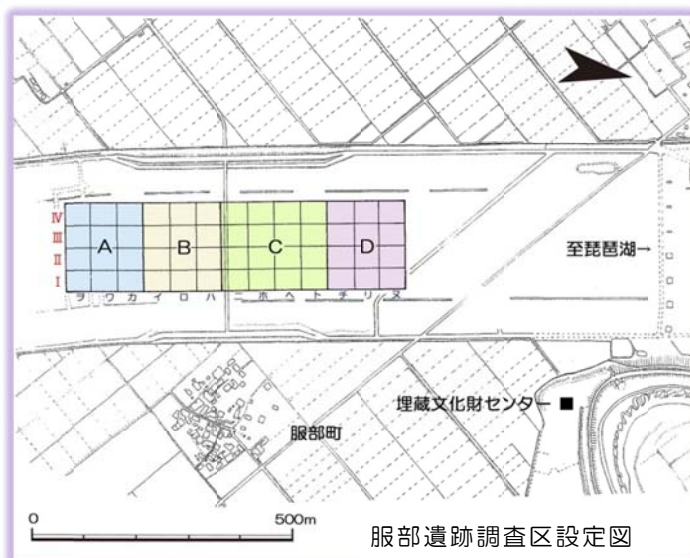
調査は、昭和50年4月から1ヶ年の期間で実施され、古墳、奈良～平安時代の遺構、遺物が検出されました。遺構の重複が著しく、作業が捗らなかったため、昭和51年7月より4ヶ月間、第2次調査を実施しましたが、終了直前に、更に下層に弥生時代の方形周溝墓群ほうけいしゅうこうぼくぐんが広がるということが判明しました。

そのことから、河床掘削工事の後、昭和53年3月から約1ヶ年、最終的な第3次調査が実施され、54年3月に全調査を終了しました。

発掘調査は、改修工事を中断、あるいは工事と並行しながら断続的に実施されました。調査日数は1000日余りで、弥生時代から中世の4層の遺構面が確認されたことから12万㎡の調査地を4回、延べ48万㎡の面積の調査が実施されました。



▲発掘調査風景



IV 調査の成果

1 成果の概要

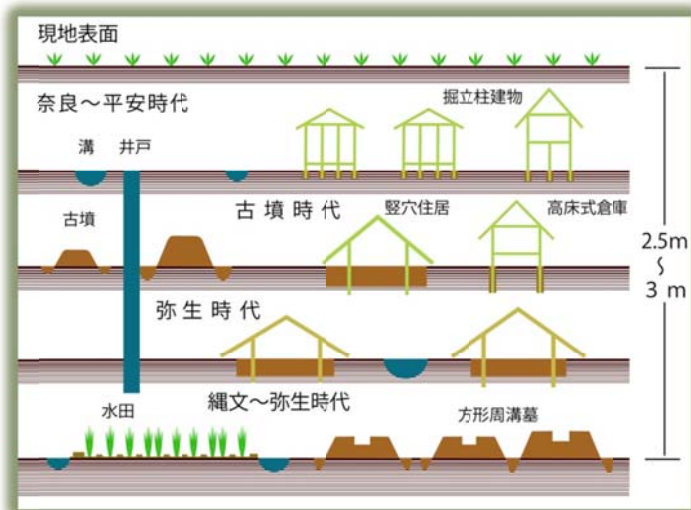
服部遺跡では、およそ4層の生活面が残っていました。図のように、上層の奈良～平安時代中頃の遺構にはじまり、下層になるに従って、古墳時代、弥生時代と時代をさかのぼり、地表下約2.5～3.0m（海拔85.5～86m）の最下層では弥生時代前期の水田跡が見つかりました。時代別にその成果をまとめてみます。

2 弥生時代

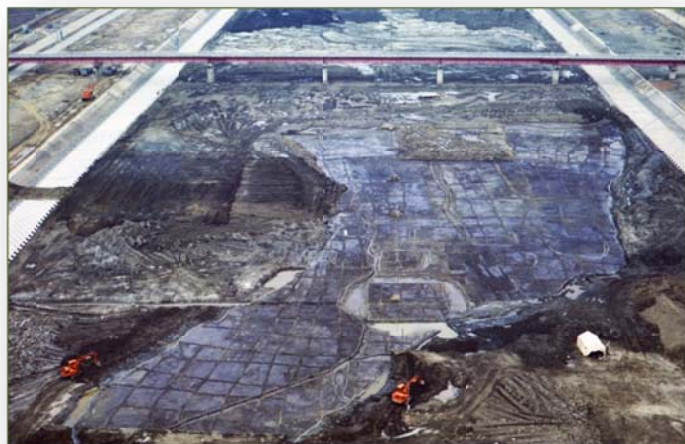
弥生時代の生活跡は、第3次調査で検出されています。中期から後期にかけて集落が営まれていたことがわかる^{なてあなじゅうきょ} 縄文・弥生時代、その下層からは中期全般にわたり^{かんこう} 環濠、その下層からは中期全般にわたり連綿と築かれていた方形周溝墓群と、弥生時代前期、琵琶湖のほとりでいち早く稲作を始めたことが分かる水田跡が見つかりました。

前期 地表下約2.5～3.0mの最下層では、弥生時代前期の水田跡が見つかりました。見つかったのは、緩やかに傾斜する低地となるA、B地区で、B地区北端で徐々に微高地地形となり水田跡の北限となります。

水田は、大小の畦畔^{けいはん}とそれによって区画された水田面、水路からなります。大畦畔は幅0.8～1.5mで、斜面や



▲服部遺跡堆積層位イメージ図



▲水田の発掘調査風景

地形の変換点に設けられていて、水量を調整するためばかりでなく、農道としても利用されていたことが考えられます。小畦畔は幅0.2～0.6mと狭く、地形に合わせて設けられています。また、水路には、用排水を兼ねた水路と、排水路が見られます。これらの畦畔や水路には、^{みなくち} 水口や^{せき} 堰も備わっています。

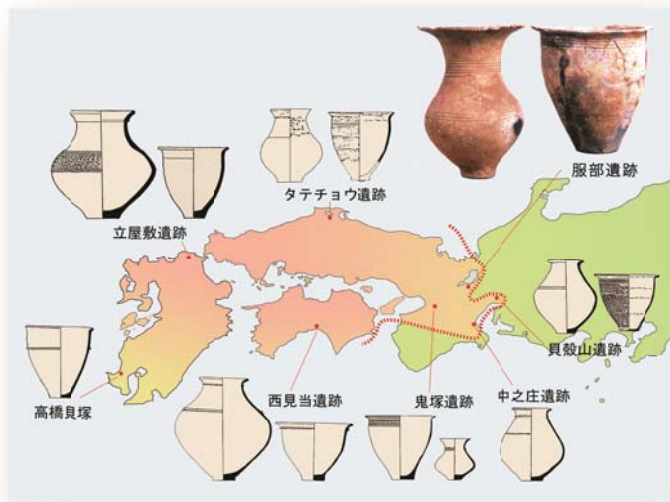
大小の畦畔によって区画された水田は260面ほどで、1区画が約10～200㎡の広さとなります。現在の圃場整備された水田が1,000㎡以上であることを考えると、大変狭いことがわかります。これは、稲の生育に必要な水がまんべんなく行き渡るように地形に合わせた結果、小区画の水田になったと考えられます。

服部遺跡で見つかった水田は約18,700㎡ですが、この数倍の広さの水田で稲作が行なわれていたと推測されています。

服部遺跡や^{おづはまいせき} 小津浜遺跡では、稲作の指標となる^{おんががわ} 遠賀川式土器^{しきどき} が見つかり、最初の頃の稲作は灌漑に多くの労力をかけないように、琵琶湖の湖岸近くに広がる低湿地を水田に利用して行われていたと想像することができます。



▲服部遺跡小区画水田調査検出風景



▲西日本各地の遠賀川式土器

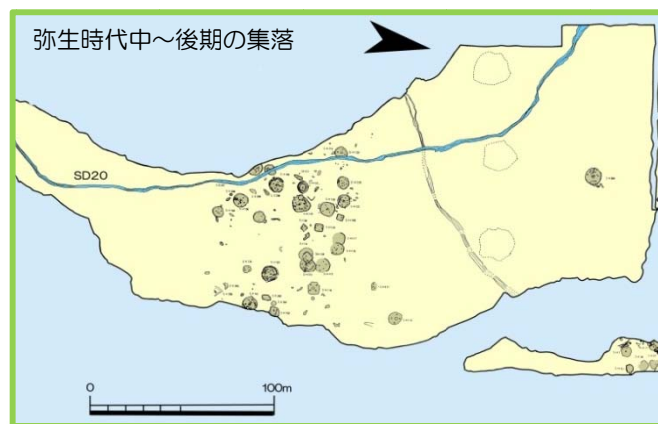
後期 中期から後期にかけての集落は、B地区を中心に
見つかっています。人々は古墳時代の四角い竪穴住居と
は違って、円形の住居に住んでいました。生活に用いた
土器は、鮮明な地域色をもった在地の土器の他に、遠隔
地から運び込まれた土器が混じり、活発な交流のあった
ことがうかがえます。

土器以外にも多種にわたる木製品、金属製品が見つ
かっていますが、飾り櫛^{どうたぐいがた}と銅鐸^{どうたぐい}鑄型はこの時期の特筆すべ
き遺物といえます。

飾り櫛は溝から土器とともに出土したもので、その形
から「竪櫛」と呼ばれています。大きさは、幅が約4.5
cm、櫛歯がなくなっていますが、8.1cmの長さが残って
います。木製で、髪に差す歯5本を削りだし、左右対称
の装飾の透かし彫りと渦巻文^{うずまきもん}を施し、赤色顔料を塗って
色鮮やかに仕上げています。

この櫛は髪の毛を^すくというより、^髷のような髪型に
さして髪留めのように飾るアクセサリー的なもので、一
般的にひろく使われていたものではなく、まつりなどの
大切な日に特別な人だけが髪に飾ることができた貴重
なものだったと考えられます。

銅鐸^{どうたぐい}鑄型は環濠とされる溝から出土しました。約37.5
cm×12cmの板状で、斜格子状に線条を施しています。
下^げ々^げ塚^{づかい}遺跡^{いせき}（野洲市）や福^{ふく}万^{まん}寺^{じい}遺跡^{いせき}（大阪府）、唐^{から}古^こ・



▲竪穴住居（弥生時代中～後期）



▲滋賀県でつくられた弥生土器（受口状口縁甕）



▲竪櫛（左は出土状況写真） ▼銅鐸鑄型



▲服部遺跡に搬入された土器

鍵^{かぎ}遺跡^{いせき}（奈良県）などの遺跡でも同じような鑄型が出
土していて、この時代、拠点的な集落では、金属器生
産も活発に行なわれていたことがわかります。

3 古墳時代

日本各地に次々と古墳が築かれた3世紀後半から7世紀初頭を古墳時代と呼んでいます。服部遺跡でも、古墳時代前期から後期までの生活跡が見つっています。

前期 この時期の遺構は、A、B地区を中心に全域に広がっていて、100棟以上を数える竪穴住居、多数の溝、^{どこう}土壕、集落を巡る環濠、野洲川の洪水の痕跡でもある旧



▲導水施設検出風景

河道が見つっています。このうち旧河道Aは、調査地西側をそれ以前の遺構を挟みながら流れていた河道で、幅60m以上、深さ4m前後の規模を測ります。この旧河道からは、多量の土器や木製品、動植物遺体などが出土した他、一部に人為的な掘開や護岸工事が施された痕跡、浄水を得るための^{どうすいしせつ}導水施設等が見つっています。

導水施設は、3層からなる堆積層の上層と中層の間で検出しました。その構造は左図のように、高低差のある方形の杭列と敷石水路とが緩やかに傾斜する溝によって連結されています。そして、敷石水路には、大木を半裁し丁寧な加工を施している長さ4m余り、最大幅0.6mの木樋を付設しています。

このような古墳時代前～中期の導水施設は、奈良県の^{まきむくいせき}纏向遺跡や^{なんごうおおひがしいせき}南郷大東遺跡、大阪府の^{かみなみ}神並・^{にしのつじいせき}西ノ辻遺跡など、近畿地方を中心に全国十数遺跡で見つっています。聖なる水のまつりに伴うものとされていて、服部遺跡でも、水にまつわる祭祀が執り行われていたことを知ることができます。また、導水施設の周囲から柱穴が見つっていることや導水施設を象った形象埴輪である導水形埴輪などから、^{おおいや}覆屋、あるいは^{しゅへい}遮蔽するための堀のようなものを備えていたことが考えられます。

中～後期 この頃、服部遺跡には、古墳が築かれています。塚（古墳の高まり）は既に削られ、周りの濠だけが残った古墳は27基を数えます。濠が円形となる円墳9基、四角くなる方墳18基の内訳となります。調査の結果、5世紀後半～6世紀前半の時期に、3～4基が20年前後の間隔で築かれたと考えられます。

古墳の規模は、円墳が直径9～25m、方墳は一辺6～18mを測ります。巨大な前方後円墳に比べて、服部遺跡の古墳は比較的小さく、そこに葬られたのは家族の長（^{こちやう}戸長）ではないかと考えられています。いずれの古墳からも死者に供えられた土器や埴輪など、



▲導水施設全体図・個別写真



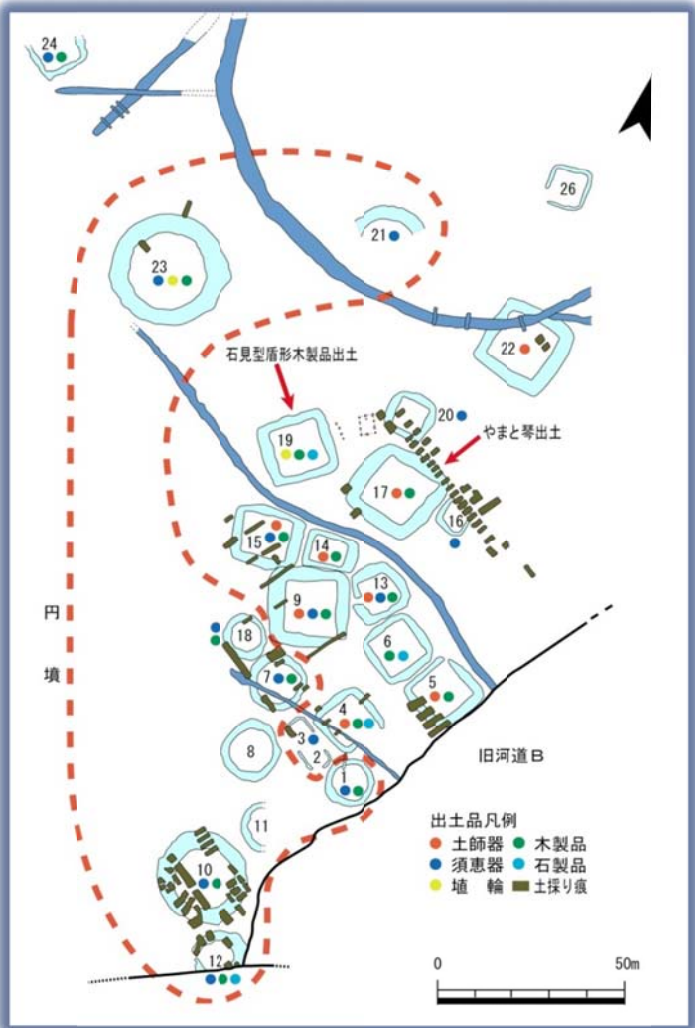
▲古墳検出風景

様々な遺物が出土しています。17号墳出土の「やまと琴」や19号墳の石見型盾形木製品はその代表的な遺物といえます。

このうち、やまと琴は17号墳（方墳）南辺の濠から、木製の組物に挟まり、さかさまの状態出土した他、琴の下からは、琴の弦を支えて音程を調整する琴柱4点も見つかっています。このような出土状況から、古墳で執り行われた死者を葬る儀礼の際に奏でられた琴がその



▲やまと琴（17号墳出土のやまと琴と琴柱



▲古墳検出平面図



▲古墳に供献された土器・木器出土風景（左上から17号墳、1号墳、25号墳、右上から18号墳、19号墳、5号墳）

後、古墳の濠に転落したと想像することができます。

古墳から出土する供献遺物からは、古墳時代の埋葬の儀式的あり方をうかがうことができます。

2 奈良・平安時代

奈良～平安時代の遺構は下流側のC、D地区に集中しています。この地区では、古墳時代前期の遺構面が北側に向かって下降していて、奈良・平安時代の遺構はその上層に形成されていました。また、更にその上層には、鎌倉時代以降の遺構も検出されています。

奈良時代の遺構は中期、後期に分類でき、中期の遺構は掘立柱建物と溝、土壇に限られます。建物の柱穴は、掘方が60～80cm四方の方形で、多くを占める3間×4間の規模の建物の他、3間×5間や2間×3間の規



▲奈良時代の掘立柱建物・井戸検出風景

模の建物も散見できますが、いずれの建物も南北方向に向き、整然と建ち並んでいます。

後期の建物には、条里溝^{じょうりみぞ}と考えられる溝に沿う形で配置されている建物が見つっています。条里溝は現水田^{じわりほうい}の地割方位と一致し、現在の水路の下から見つっています。



▲奈良時代の銅印（左）・銅銭（右上）・帯金具（右下）

平安時代の遺構からは、掘立柱建物や溝、井戸跡が検出されています。建物は奈良時代と違って、柱穴の掘方は方形から円形になり、倉庫が主流となりますが、奈良時代後期の建物群と同方位で、軒を揃えて整然と建ち並び、景観は継承されています。

約60棟にもおよぶ奈良～平安時代の掘立柱建物や条里溝^{じょうりみぞ}からは、須恵器^{すえき}、土師器^{はじき}、黒色土器^{せくしどうき}、施釉陶器^{せゆうとうき}、木製品、金属製品など、多種にわたる遺物が出土しています。なかでも、銅印や和同開珎^{わどうかいちん}をはじめとする銅銭^{ちゅうせん}、木簡^{もくかん}、帯金具^{おびかなぐ}、100点以上の墨書土器^{ぼくしよどき}、硯^{すずり}は集落を性格付けるうえで、大きな手がかりとなります。

まず、銅印はD地区の条里溝から帯金具や銅銭とともに出土したもので、奈良時代末期のものと考えられます。約3.3cm角の印面に乙貞^{いんしん}の印影が刻まれています。当時、このような印鑑を所持していたのは、役所や寺院、豪族に限られていて、大変希少な遺物といえます。

帯金具は律令官^{りつりょうくわんにん}人が身につけた革帯^{かわおび}を飾るもので、丸鞆^{まるもろ}とよばれる部分が2点出土しています。銅銭は奈良時代につくられた和同開珎^{わどうかいちん}、萬年通寶^{まんねんつうほう}、神功開寶^{じんぐうかいほう}、隆平永寶^{りゅうへいえいほう}など、合計80枚を数えます。

その他、薄い板に墨で文字が書かれた木簡や須恵器や土師器に文字が書かれている墨書土器、硯など、字を読み書きできる人が限られていた時代であるのに反して、文字資料が多数出土しています。このような特徴的な遺物は、一般的な集落から見つけることは少なく、古代の役所などの遺跡で多く出土しています。このことから、約60棟見つかった掘立柱建物は、奈良時代の行政区画で定められていた服部郷^{はっとりごう}の役所、あるいは古文書に記録がある「大安寺墾田^{だいいんじこんでん}（奈良の大寺院であった大安寺の所有する荘園^{しょうえん}）」に関連した集落ではなかったかと考えられます。



▲野洲郡の郷の推定図

律令制の行政区画は、現在の都道府県にあたる「国」の下に「郡」、さらにその下に「里（郷）」が置かれました。守山市は、境川より南側が栗太郡、北側が野洲郡に属していました。境川から日野川までの地域には、三上郷、敷智郷、服部郷、明見郷、邇保郷、篠原郷、山本郷、馬道郷があったとされています。

昭和の発掘史に煌々 服部遺跡発掘調査の概要

平成 29（2017）年 10 月発行



守山市立埋蔵文化財センター

〒524-021 滋賀県守山市服部町2250番地 TEL & FAX 077(585)4397

Email : maizobunkazai@city.moriyama.lg.jp